

第六編 親鸞教の概要

本願他力

尊高なる理想を追い、深い哲理を究めた人はある。だがそんな人は多く人生の真相、大地の人間としての心の声を忘れる。人間の凡情に流れてゆく人は、とかく高い理想を忘れる。

しかるに、廣大にして幽玄なる仏教、その大乘仏教の示す崇高い理想を追うて、単なる眼だけでなく、耳だけでなく、頭だけでなく、全身全霊をもつて、しかも絶対に大地に生きる人間としての心の声をゴマ化さず、飽くまで一切衆生の苦悩を代表して、血みどろの求道過程を通して、ついに不滅の信境に到達した人がある。聖親鸞がそれである。高き久遠の大理想は、低き大地の愚禿の合掌の上に生きた。即ち南無阿彌陀仏の他力本願の世界がそれである。以下その信境について述べる。

他力本願

親鸞聖人の宗教は、いわゆる他力本願の宗教である。他力とは、人間小我のほからいが、聖なる如来大我によつて打壊れて、人格全体がいわゆる仏凡一体の世界において、絶対清浄真実なる如来によつて生かされることである。

然るに世に他力本願の文字ほどまちがつて使われているものはない。世の常識者流は他力をもつて無力の意味となし、相對者が絕對者に依頼して己は何事をもなすことのないのが他力であると考えている。まちがいがまた甚だしい。春来つて桜の花は開く。彼は独立自尊己れの色に咲くといえども、これ即ち他力である。春が来なければ絶対に咲くことは出来ない。太陽、空気、水、栄養等々の他力によつて彼は、自らの色に咲き得たのである。彼には一毫も自力を許されない。天地自然の母は桜花の上に生き、桜花は彼の色に咲いて自然普遍の母の懷に復帰ろうとする。彼生きて、自然の母は莊嚴され、自然の親が生きて桜が生きる。彼此一体の天地これを他力というのである。これは単なる一つの譬えであるが。

他力とは相對者が絕對者に生かされることである。尽十方無碍光にして無量寿、生死を超えたる絶対平等なる大生命たる如来が生きて、衆生が生かされる。衆生、本願の大道に生きて、如来の至純なる生命を全うする。この仏凡一体の聖域、我にあつては金剛不壞の信といい、仏にあつては本願力という。金剛の本願力、衆生に顕現して大信仏性となる。これをのみ他力という。門外漢の誤解はまだしも、いわゆる他力真宗の門徒と称する僧俗においてすら、この他力を得手勝手に領解して、本能我の赤裸々をもつて他力に生きるものとなし、あるいは死後の浄土にのみかたよりて、浄土ならぬ欲樂に、人間的享樂の延長を求めて、無上正真道の獲得を忘れる。

聖曇鸞『往生論註』に曰く、
 「それ菩薩の仏に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静おのれに
 あらず、出沒必ず由あるが如し。恩を知りて徳を報ず、理宜しく先づ啓すべし。」
 と。

もし例を忠臣蔵にとれば、浅野内匠頭長矩の無念は、そのまま大石内蔵之助の無念
 である。浅野公の意志は、そのまま大石の意志である。心を千々に砕き、身を如何な
 る苦悩に横たえようともし、君臣一体の恩義を忘れることは出来ない。しかるに奥野将
 監、大野九郎兵衛等は、身は千石取りの大神でありつつも、財を集めて一身の安楽を
 求めて逃亡した。大石の動静出沒には、その一挙手、一投足にまで、君臣一体の魂が
 生きており、大野およびその同類は、己れの小我的享樂以外には何ものも有り得な
 い。大石はじめ四十七士の歩む世界が他力であり、大野の輩の生きた世界が自力であ
 る。

人は悉くこの意味の他力でなくてはならない。すでに前編において述べた如く、自
 力小我の迷妄は、ただ個人的享樂以外に一歩も出でない。菩薩道はこれからは生れな
 い。普徧平等の如来の本願に生きる者、これを菩薩道という。菩薩道は他力である。
 他力とは如来の本願力これである。

悪人正機

聖人の信境を悪人正機の世界という。歎異抄に曰く

「善人なほもて往生を逐ぐ。いはんや悪人をや。しかるを世の人つねに曰く、悪人？
 なは往生す。いかにいはんや善人をやと。この条、一旦、その謂あるに似たれども
 本願他力の意趣に背けり。」と。

如来の大慈悲は、善人よりも悪人に重く、善人も助けられるけれども、悪人こそ必
 ず助かるといふのである。これ実に宗教の真髓の光閃である。悪の奨励でもなく、人
 間の放縱性の讚美でもない。自然の浄土の内奥に秘められたる如来大悲の真相であ
 る。如何なる奈落のどん底に悩む悪人も更生せしめる大愛、全人類の前に掲げられ
 たる永遠の真理である。

一切の迷いを断ずる剃刀であり、
 一切の煩惱を焼きつくす聖火であり、
 一切の氷を解かす熱であり、
 一切を本質的に生かす真実である。

唯心すべきは、剃刀も火も、真実も、これを弄んではならないことと、これを拒ん
 ではならないことである。如何に多くの人が、これを拒んで無明苦悩の巷に輪廻し、
 如何に多くの人がこれを弄んで、身をあやまつたことであろう。

医者には重患に重きをおき、教師は不良児、虚弱児にこそ愛を注ぐべきである。悪人
 をこそ抱きあげずにはおれない大慈悲こそ、人生生活の基調となるべきものである。
 倫理を超えたる愛の本質について語り、如何なる者をも更生せしめんとする宗教であ
 る。悪人正機の大慈悲を説かれることは当然である。

愚禿

誠に悪人正機の世界こそは、親鸞聖人によって体験せられたる、宗教の最高峰であった。この悪人正機の大慈悲にふれて、見出されたる我こそ「愚禿」であった。愚禿とは如来に救われて大地に生きる者の名告りである。

親鸞聖人は、飽くまで大地に生きる一切衆生に同じて、いわゆる聖道門を捨て、自ら肉食妻帯を敢行してその内的運命を我が運命となし、一切衆生の悩みを我が悩みとなし、その罪障を一身に荷負して地獄一定を諦観し、ついに全人的自覚に於いて愚禿と名告られたのである。

愚禿とは一切衆生を代表して、如来に救われたる者の名字である。

愚禿とは更に非僧非俗の意味であった。親鸞聖人は九歳にして出家された。人生をのがれたのである。即ち俗の世界を去った非俗である。だが叡山二十年の求道はついにいわゆる僧の世界を去って、再び人生にのがれて念仏に帰した。

多く人は、人生にいつゝも、常に人生を逃れんとしてかえって人生にくぐられ、苦しめられる。

聖人は、人生に逃れて、人生を超越したのである。僧に非らざる人生の俗界に還つて、そこに仏と会うことが出来たのである。この非僧非俗こそ、愚禿である。だから見よ。その内心には「名利の大山に迷惑する」ことを歎きつつも、そこに求められた何の名利があつたか、財欲があつたか、権勢があつたか。紫衣金欄をかなぐりすて、金殿玉楼をさげ、俗塵に自己を没しおわつて、時に史家をして実在の人であつたことすら疑わしめるもの、この黒衣の聖者、愚禿の真面目であつた。真に黒衣こそ、非僧₃非俗の愚禿の象徴である。

宗教生活

彼岸

浄土は物を超えて彼岸に実在する仏の国である。久遠の大理想の成就されたる帰依の対象である。浄土はすでに彼岸である。現実の世界を超絶せる、絶対価値の世界である。涅槃といい、滅度といい、法性といい、法身という。時間、空間を超えて、それ自体独立せる絶対真理そのものを体とする、常住、大楽、大我、清浄を内容とせる浄土である。これ聖人が

「仏は則ち是れ不可思議光如来なり、土もまた是れ無量光明土なり。」と説かれし真仏土である。真仏土は人間の常識を超えたる人生の彼岸である。単なる無自覚の生存ならいざ知らず、これなくしては眞実生活はあり得ないという、生活者の必然の帰依の対象である。されば人間の知識、常識的分別を超越せるものであると共に、自覚者の帰依の心行に内在して、人生生活の眞実の根底となるものである。

即ち浄土は現実を超越するが故に、よく現実に内在するものである。

浄土は理想の彼岸なるが故に、人生の指導原理である。

されば、如来はこの彼岸に一切衆生を召喚して、迷妄なる人間生活を全否定しつつ、それを通して、如来の真実を全肯定し、限りなく、彼自身を廻向顕現して、一切衆生を彼の内的眷族たらしめ、そこに大菩薩道の野を開顕せんとするのである。

私の著し方はあまりに難解であつたかも知れない。だが、浄土とは、人生生活の彼岸であつて、現実の指導原理であることがはつきりすれば満足である。

御同朋御同行

理想の彼岸に実在する尽十方無碍光如来は、一切衆生の親である。唯一切衆生の警告である。されば、釈尊は、まず不死不滅の法身に同じて、自ら久遠実成の釈迦仏を名しかるに聖人は、自ら、暗よりぬけ出でたる衆生相において、この如来平等の大慈悲に合掌帰命して、如来の子たることを宣言し、如来平等の大慈悲に応じて、一切衆生は悉く御同朋、御同行なることを信じ、生活し、実践されたのである。しかり聖人にあつては、一切衆生は如来による兄弟であつた。これ即ち人生生活の基調である。人間の上人間もなく、人間の下人間はない。共に同心に、聖なる如来の同朋として絶対尊重さるべきものである。我らはこの信境において、人生を見返さなくてはならない。

報謝の生活

「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳は骨を砕きても謝すべし」(和讃)

如来に生きる者の生活は、その内奥より動き出でる本願自然の力に乗托して、不断の感謝と懺悔に色どられつつ、自己の全我を捧げて、いわゆる報謝の大道に生きるのである。

報謝の生活とは、甲の恩に対して、乙が返報をして、それで事おわるとすることではない。限りなく恩恵を享受しつつ、自己自身の相に輝くことである。

春が来れば桜が咲く。

桜は彼自身の色に咲いて、普徧平等なる自然の母の懐に還ろうとする。

彼は唯、彼が自然のままに、その個性のままに咲くことによつてのみ、自然の母の懐に還ることが許される。

「あれを見よ深山の奥に花ぞ咲く、まごころつくせ人知れずとも。」(古歌)

けれども我らは、桜花爛漫たる相の上に、大自然の美しさを讃嘆し、その神秘を賞讃する。桜が生きる前に大自然が生きたのである。

大自然は普徧であり、平等であり、絶対である。

楼は、個性を持ち、差別相であり、相対である。

平等生きて特殊輝き、特殊輝きて平等を顕す。

平等なる大自然の母なくして、特殊の個性をもつ桜の美しさはなく、特殊の個性いよいよ花の上に輝かなければ、大自然の母は顕われない。

彼は此によつて生かされ、此は彼によつて顕わさる。

彼此一体なるところに、桜の報謝の生活がある。

一念に如来の生命の全体を得るが故に、大満足があり、生きても生きても、働いても働いても、これでいいということがない所に報謝がある。

報謝とは、普偏の如来に遠つてゆく「往相の生活」そのものである。

誰か、桜に、春一度咲く花より外に、孝行を求めやうか。

聖人の南無阿弥陀仏、信一元の生活に論理と實際がここにある。

慈悲も念仏にて足り、孝道も念仏にて足り、師道も念仏にて足り。

彼岸にあつては如来といい、現実にあつては菩薩という。如来あつての菩薩である。菩薩あつての如来である。如来は彼岸にあつて菩薩を招喚し、菩薩は生死界にあつて如来を顕す。この如来と、この菩薩、一体に貫流する血潮こそ「法」である。仏、法、僧の三宝という。一体にして三、三にして一、仏の具体的意味がここにある。三宝に対する絶対帰依を通して、彼岸の如来に還つてゆく、この信こそ、生活の最初にして最後である。ああ、純粹真実なくして何の生活ぞや。